

魚心あれば「水心」

沖縄県 沖縄県立開邦中学校三年 玉城 蒼

さんずいの漢字を思い浮かべてみれば、如何に私達の生活と水とが深く関わっているか、ということに気付かされる。海、洗、湯、涙……。と、全てが私達にとって身近で重要なものだ。また、私達の食べる農作物が雨水の恩恵を受けて成長したり、遡ればそもそも古代四大文明も河川の近くで育まれたりしたように、人類と水は切っても切れない関係にある。つまり人は「水によって生かされている」と言っても過言ではないだろう。

しかし、それにも関わらず、私達は今の豊かさに甘えて、深く考えることなく水を使い続けている。その水に対する「驕り」を初めて痛感したのは、私の暮らす沖縄で二〇一八年に水事情が悪化したときのことだ。

その年は梅雨の時期にも関わらず降水量が少なかったのだ。それによる県民生活への影響が懸念された。その水事情の悪化が起こる以前は、蛇口をひねれば無限に湧き出てくるようなものだと考えていた。ところが、その水事情の悪化により、日に日に下がるダムの貯水率をニュースで見て、身に以て水問題への危機感を覚えた。幸い給水制限に至ることは無かったものの「水問題は他人事ではない」と、そのときから自分なりに節水に注意して、より無駄に使わないように取り組みはじめた。

それ以来、水問題への関心を持つようになった。台風が通過する沖縄は水に困ることはないとなんとなく思っていたが、実は川が短いためすぐに水が流出してしまい水不足になりやすいという事情を知った。それまでの認識には「驕り」があった。多くの人もその「驕り」を持っているだろう。そのせいで、今尚私達は地球温暖化等の気候変動を引き起こし、限りある水資源を傷つけてしまっている。気候変動は渇水や洪水など水資源に悪影響を与える。現に我が国でも西日本豪雨や江の川の氾濫等が起こっている。

ここで見直さなければならぬのは、水とは一体誰の物か、という問いだ。私が思うに、今地球にある水とは、今現在の私達のためだけにあるものではない。未来からの「借り物」なのである。水とは太古の昔から脈々と受け継がれてきたバトンであって、私達もそのバトンを未来へと受け継がなければならぬ。私達には未来へとつなぐ責任があるし、未来へとつなぐべき「借り物」を私達が止めるということは、決してあってはならない。未来から預かったにすぎない「借り物」を渡す責任も気候変動のような問題を起こしてしまった責任も、今を生きる私達「一人一人」にある。私達一人一人の「驕り」が水を傷つけてしまった。とはいえ、水への責任が私達一人一人にあるということは、言い換えれば水問題は私達一人一人の努力によって充分に改善しうる問題であるということだ。

「借り物」をぞんざいに扱う人はいない。私達一人一人が水は未来からの「借り物」であると、しっかり意識すれば「驕り」は捨てられるだろう。加えて、「水に生かされている」私達が水を取り巻く現状を正しく理解して、毎日少しずつ「行動」することが必要だ。財布の中が危ないと思えば、財布の紐をきつく締めるように、地球の中の水が危ないと思えば、水道の蛇口をきつく閉めることもきつとできるはずだ。

魚心あれば水心。私達一人一人が現状を改善しようという「魚心」の姿勢を示せば、地球の水問題も好転して「水心」を示してくれるだろう。